

# レガシーシステム刷新×ベンダーコントロール支援事例 複雑化するベンダー管理をどう乗り越えたか



1. ベンダー主導から金庫主導のシステム導入へ転換し、IT投資額を従来の3/4に削減
2. レガシーシステムの撤廃によりシステム運用負担の軽減と信頼性向上を実現
3. 情報通信経路や認証系の整理によりセキュリティと利便性を両立

## レガシー脱却とシステムの全体最適化で 利便性とセキュリティの両立を目指した

——システムリプレースの目的と背景をお聞かせください。

当初、本プロジェクトは金庫独自の補完システムが更改時期を迎えたことをきっかけに、利便性の向上とレガシーシステムの撤廃を目的として立ち上げました。

まず最初に検討したのは、補完システムが本当に必要かどうかという点でした。実際に各機能の利用状況を調査したところ、利用率は全体の3割程度にとどまっていました。そのため、この程度の利用率であれば、共同センターが提供しているDWH(データウェアハウス)で十分に代替が可能ではないかと考えました。

あわせて、金庫内の全てのシステム構成を把握しようとしたところ、各種サブシステムの設計書などの資料が整理されていないことや、導入ベンダーに依存していたことにより単体でシステムが構成され、複数の重複インフラが存在している状況でした。その結果、システム投資は右肩上がりに膨らみ、さらにシステム運用負荷も増えていました。

こうした課題を受け、勘定系と情報系に整理し、ネットワークからクラウドシステム、各サーバや端末までを統合することで、金庫全体の利便性とセキュリティを両立したシステムデザインへの見直しを行うこととしました。

## ベンダーの限定的な対応範囲や 複数ベンダー間の調整、技術者不足による 受入体制の確保が大きな課題

——プロジェクトの開始前に、貴庫が抱えていた課題や懸念をお聞かせください。

プロジェクトの対応範囲が非常に広く、しかも短期間での実現を目指していたため、主要ベンダーだけではハード面の対応はできても、ソフト面での対応は限定的であったことが大きな課題となりました。

特に、補完システムから共同センターのDWHへの移行や、ベンダーごとに導入されていたインフラ設備、重複していた認証系システムの統合には、複数ベンダー間での技術的な調整や上流工程の推進に不安が残る状況でした。

さらに、プロジェクトを進める中で、既存システムの要件や仕様を把握している有識者の世代交代等により、再構築設計や導入側としての受け入れ体制を十分に確保できないという課題もありました。そのため、専門的な技術がなくても導入できるプロジェクト体制を構築する必要が出てきました。

お話を伺わせていただきました。



東春信用金庫 様

東春信用金庫様は、愛知県小牧市に本店を置く信用金庫で、愛知県西部を中心に中小企業金融と地域社会の発展に貢献されています。

- 所在地 : 〒485-8656 愛知県小牧市中央一丁目231番地1
- 代表者 : 理事長 神 孝
- 創業 : 1952年6月
- 店舗数 : 19店舗
- 事業概要 : 貸付業務、預金業務、有価証券投資業務、内国為替業務、付帯業務
- 役職員数 : 209人(2025年3月末現在)

## ベンダーと金庫の“グレーゾーン”を埋める存在として柔軟性と技術力、そして過去の実績による信頼感が決め手に

——当社にご依頼いただいた経緯をお聞かせください。

今回のプロジェクトでは、主要ベンダーの委託範囲が限られていたことに加え、技術的な調整やプロジェクトマネジメントの支援が早い段階から必要であることが明らかになっていました。特に、現行システムの仕様が不明な点も多く、金庫内での調整や意思決定が求められる場面が増えていました。

そこで、受託側ではなく委託側の立場でベンダーとの調整や技術支援を担っていただける企業を探し、貴社にご相談させていただきました。

主要ベンダーでは対応しきれない領域や、技術的な判断が必要となる場面が多く発生することが予想されたため、そうしたベンダーと当庫の“グレーゾーン”を埋めていただける貴社の柔軟性と技術力に大きな期待を寄せていました。

また、貴社には金融機関での豊富な開発実績やトラブル対応、プロジェクトの立て直し実績があることも把握しており、その対応力と信頼感が今回の選定の大きな決め手となりました。

## 調整力・技術力・現場対応力といった総合的な支援を期待

——当社に期待していたことをお聞かせください。

貴社には、プロジェクトの成功に向けて大きく3つの役割を期待していました。

1つ目は、ベンダー間の調整役としての機能です。複数のベンダーが関わる中で、それぞれの対応範囲が限られていたため、仕様決定や進捗管理などの調整が必要になることを当初から強く意識していました。特に、システム部門だけでは技術的に対応が難しい場面も多く、貴社には技術的な観点からの助言や指摘を通じて、ベンダーとの橋渡し役を担っていただくことを期待していました。

2つ目は、主要ベンダーが対応しない領域の補完です。補完システムは今回の主要ベンダーとは異なるベンダーが導入しており、さらに共同センターのDWHへの移行もあったため、受け入れてくれるベンダーがいませんでした。そこで貴社にご対応いただくことで、プロジェクト全体の推進力を維持できると考えました。また、ネットワークの勘定系と情報系の分離や、重複していたシステムの統合など、仕様や構築において技術的な判断が求められる場面でも、貴社の柔軟な対応力に期待していました。

3つ目は、現場に寄り添った柔軟な対応力です。当庫は都心から離れているため、現場での常駐対応が不可欠でしたが、貴社であれば積極的に現場に入り、日々のコミュニケーションを通じて細かな課題にも迅速に対応していただけたと考えていました。

事務統括部 部長  
加藤 宣宏 様



理事長  
神 孝様



専務理事  
小池 元裕様

——実際に当社が行った支援で印象に残っていることがあればお聞かせください。

当初は技術面だけの支援をお願いしていましたが、レガシーシステムの移行に際し、短期間で適切な開発体制を整えていただけ点においては、これまで大規模プロジェクトを経験されてきた貴社に依頼して本当に助かりました。おかげさまで、移行も予定通りに完了しました。

——他社と比較して、違いを感じた点はありましたか？

金融機関の独特な業界であっても柔軟な対応力とユーザー目線での仕様確保ができる点だと思います。

——当社の支援に対して、特に良かった点、効果的だったと感じた点、改善点はありましたか？

ベンダーとは異なる柔軟な対応と現場への寄り添う姿勢で、技術支援をしていただき当庫に無い技術面が補えました。また、迅速な体制確保していただいたおかげで、オンスクでプロジェクトを進行できました。

——金庫内SEとして外部から人材を入れて良かったと思う一番の理由は何ですか？

プロジェクトの推進力や技術面をしっかりと確保できたことです。金庫内だけではスキルの向上や新たな実績づくりがほとんど難しい状況だったため、外部の専門的な力が大きな支えとなりました。

——今後の展望や、当社への期待値がありましたらお聞かせください。

今回のプロジェクトで、ネットワークなどの基盤整備ができたため、その上に実装しているポータルを含めたシステムの活用や拡張の提案を期待しています。

## 導入から活用へ 信用金庫の未来を見据えて

——このプロジェクトが信用金庫の将来像にどう貢献するとお考えですか？

このプロジェクト経験で、金庫側主導でより安全かつ信頼性の高いシステム投資を行えるようになりました。

今一度、信用金庫の原点に返り、顧客目線のDX推進していき地域社会の発展に貢献していきたいと考えています。

また、どれほど優れたシステムを導入しても、使いこなせなければ意味がありません。職員一人ひとりがITリテラシーを高め、日常業務で活用する体制を整えることが、次の重要なフェーズだと考えています。

